

# 体育の社会学的研究課題

§ 文化社会学的側面の研究課題

体育研究室 大 西 国 男

## Topics of Sociological Research in Physical Education

by

Kunio Onishi

Continue—Some items for studying Culture~Sociological Profiles~a,b,c

- c) relations between personality system and physical education
- d) influence of mass-communication for physical education

*Ibaraki University, Mito, Japan.*

*Oct 30, 1961*

§ 文化社会学的側面の研究条件

(紀要10に続く)

### Ⅲ 体育とパーソナリティ体系

#### (4) パーソナリティ形成に対する体育の影響

〈パーソナリティ研究と文化の認識〉 人間が生物学的な個体として生れて来ると、やがて社会化の過程においてパーソナリティが形成されて行くのである。この事柄は、幼児が生命を保持するに必然的に成人の庇護による外ないということ、人間として生命維持に必要なものを獲得して社会生活に適應する手段として成人(社会)と交渉することである。

従って、パーソナリティ形成の過程において能動的(形成して行く)であれ、受動的(形成されて行く)であれ、要するに社会との交渉過程の面をとりあげるべきである。すなわち動物的段階から脱して次第にパーソナリティを形成して行くのは、個人が人間社会における規範や価値を学習することによって次第に社会化されて行く過程であるということである。従って、パーソナリティ形成の過程と社会化の過程とは全く背腹の関係にあると見

ることができる。

このときパーソナリティ形成には、生物学的な面と社会的な面の条件を考慮にいれてパーソナリティを構成する諸要素を検討してみる必要が生ずる。

社会の生活が文化というものの存在を意識することによって向上するものであるという観点にたてば、近代における科学上の発展の中で最も重要なものとして取り上げなければならない事柄の一つは、文化を認識することが出来るようになったということであろう。しかもこの文化意識というものは、自分の社会と他の社会との習慣を対照してみる機会を得たとき初めて理解することができるのであって、他の社会の文化を知らないものは自分の社会の文化を理解することは困難である。すなわち自分達のもつ文化及び文化の内容を認識し評価するためには、優れた客観性を持つことを必要とするということである。

然し、近代では自分達人類が生活し活動し発展する舞台は環境であり社会過程における交渉であって、かつまたこれらが大部分文化によって決定されていることを認めざるを得ない。従って、研究の対象を個人<単一文化の枠内で育った>に限った場合に人間の本质として得た概念は、必ずしも真実に近いとは言えないのである。

行為の根底にある動因や動機の問題ばかりでなく、ある種の行為には本能が適用され、しかも文化的諸条件から直接導き出されると考えている。学習の結果によって得たと考えられるような行為を説明する場合にも、しばしば本能と云う言葉が持ち出され、本能論にも多くの混乱が見られるようである。<sup>1)</sup>然し今日では他の社会とその文化に対する知識を蓄積することによって、生得的なものと学習の結果得たものが(生得的動因と多くの潜在的学習能力)<sup>※</sup>存在することを知って、真実に接近したものを把握することも可能になるといえよう。

しかしながら、パーソナリティの観察、資料の記録などにも今日なお多くの困難が伴うものであるから、信頼できる資料を作成することは今日の社会では困難である。<sup>2)</sup>われわれはなおその場の観察と、観察者の主観的な判断とに殆んどゆだねなければならない現状だといってもよいからである。

<パーソナリティ形成における体育集団の構造特質による影響> 社会によってパーソナリティの規準が異っていることは誰でも疑いを持たないところである。<sup>3)</sup>ところで、ある一つの社会はパーソナリティの規準を一つもっているか、またその社会内の集団にそれぞれ結びついている異ったパーソナリティの規準を一つもっているかという点に考慮の余地がある。然しこの二つの考えを調和させた考えを持つことは困難な事ではないのであって、一社会内における高度に一般化された特定な行動、価値態度体系は、個人の特定な反応の根底をなすものであり、これと同様に分有される価値、態度体系は単純な外面

反応（身分、性別にむすびつく幾つかの異った外面的行動）として異った形式の中に反映すると見ることが出来るのである。

このようにパーソナリティにおける一般的反応、特殊的反応の規準は、共通の要素として緊密に組み合わせられた一つの綜合体を形成するものであると見ることが出来るから、全体として、その社会のもつ基本的パーソナリティ型をもつと呼ぶことができるのであって<sup>4)</sup>それと同様に、社会内で区分されたいくつかの諸集団のそれぞれに結びついた反応の綜合体が附加的に存在しているという考えに他ならないのである。

社会のメンバーに共通の思想と価値を与え、共通の状況下においては一致した情緒的反應を示し得るようにさせようとするのは、上述した綜合体の存在をもって論ずるよりほかないのである。体育集団が特殊的立場をもつものであり、社会集団の選択的文化であると考えるとき<sup>5)</sup>、チームに流れる一連の共通要素〈一般化されたチーム自体の価値、態度体系〉を根底として諸反應を形造ることになる。しかも体育集団が同志的集団であったり、目的集團である場合においては、その社会過程には能動的なパーソナリティ形成の過程を見ることが出来るのであって、集團の成立や人間関係、社会過程、行動様式が、特殊的な反應の結果必然的に起る共通的な価値体系を作ると見るべきである。従って体育集團の構造特質とその機能によって、いよいよ高度に一般化され〈その集團はパーソナリティの規準を一つだけ持っていると考える〉た態度と反應を示すに至るある程度の特定性を持つものであるといえよう。これは集團の凝集度が高ければ高い程特殊化の傾向を持つと考えるものであり、この成員達が個々に分有する外面的行動のいくつかの異った様式があるとしてもすべて一定の型によって表現され、一般的反應に吸収されて、パーソナリティの共通の要素としてチーム本来の基本的パーソナリティ型を造ることになる。

凝集度の高い体育集團であるほどその集團は成員の行動を支配したり統制したりするものと考えられ、これがまた社会的意味の文化の圧力となって行動規制の基礎となり、集團の体系や構造を説明するものとなる。この事はまた、パーソナリティの構造と社会体系の構造を平行論的に説明しようとするもとでもある。

体育集團の目的、構造と機能の特性を一律に論ずる事は不可能である〈茨城大学紀要8第一編P.173〉が、すでにある点において観察できるような遊戯集團、体育集團のもつグループモラル、社会的道徳的問題意識、行動態度の価値体系が、体育的集團に共通に流れる一連の要素として基本的体系を形成するのであって、外面的に異った諸反應もチーム自体の一般的反應に吸収され、体育集團や特定チームのそれぞれチーム本来のパーソナリティ型を造り上げることになる。

この点で体育目的集團と附加的・附隨的目的・機能をもった体育集團とでは自らパー

ソナリティ型を異にする面を考えなければならないのであって、それと同時にそれらの集団内で区分される諸集団のもつ反応も附加的に存在しているものであるとも見るべきであろう。

殊に体育集団の特殊性はチームの成員がすべて全体の目標を目指して統一され、チームを自己と同一視するものであって、グループモラルと集団内の人間関係は相互依在の関係で〈モラルとは集団内における自発的凝集である；リピット〉高いモラルを示す体育集団では成員の関係は親和的・協力的であるといえるのである。

体育的活動が集団的に行われる場合は、当然人間関係が社会的問題の解決や社会的発達の努力や行動－態度と関連して起って来る。個人と個人，個人と集団，集団と集団の間において生ずるあらゆる場面〈結合，対立，従属〉が集団内における成員の直面する行動支配の条件となる。体育集団においては、基本的な問題として協同（結合）・競争（対立）・指導（従属）の関係がいろいろの立場や関連〈直接的・間接的，緊密・疎遠，現実・想像，身分・役割，年齢・性別など〉において関心の中心となるものであって、体育集団がより多く直面する具体的な協同的活動の経験をとおしては協力的態度や行動の反応過程を学び、競争的活動に直面しては勝敗に対する態度やフェアプレーの態度や協同と競争の関連的認識の機会をもち、強制と協力を行動基準としては従属に関連した体育活動を考え、あるいは経験する機会を多く持つものである。集団生活に必要なが故に相互の理解と協力を認め、権力や力の故に行動基準の中に受け入れられる〈従来、体育活動では強制道徳を強調する考えのあることを批判されるむきもあった〉のであることを学ぶことによって規則が集団生活に必要なであることを認めるであろう。

体育集団の特殊性の問題は、体育活動における社会発達の問題でもあり、体育におけるパーソナリティの形成の問題でもある。この文化としての体育集団あるいは文化としてのパーソナリティが、いかにして社会集団としてまた社会的態度として転移するかという事が問題点であり、現実がいかに行動基準として反影し価値＝態度体系を形成しているかということである。どうあるべきかという理想的パーソナリティの形成を要求する以前に研究されるべき課題である。

〈生理学的面での影響〉 パーソナリティの構造的諸要素に生物学的条件と社会的条件との二つの面で検討してみる必要を考えるのであるが、根本的には、パーソナリティは個人が経験の結果によって形成して行く〈経験に対する諸反応の綜合体である〉ものであって、しかもこの経験とは、個人とその環境との相互作用によってなされるものであるから、個人の欲求と環境への適合は絶えず不満や不均衡の間で惹き起されて発展するものである。

人間は遺伝的、生物学的な基礎をもって生まれて来るものであるが、不均衡を均衡化するための活動、不快を快と感じ、あるいは緊張を解消にむかわしめるための活動は必然的に惹き起される。主観的にはしばしば不快と感じられるものがいつもそうであるとは限らないのであって、全然気付かない身体内の原因不明のある化学変化にその源を発する場合もあれば、漠然とした欲求の場合、特殊なものに対する欲求の場合もあって、それに伴う行為は身体的状態によって起るといえることができる。このような動因は、生得的なものもあれば学習の結果得たものもある〈潜在的学習能力をもつ〉と考えられる。

すでに論じてきたように、どの点が社会的影響によるものでありどの点が生得的影響によるものであるかを区別することは不可能であるから、生理的因子〈身体の構造や生理的発達過程〉による範囲を限界づけることは至難のことである。しかるに、個人の生得的資質というものは、個人の経験の範囲やその種類に影響を及ぼすところが大きく、しかもパーソナリティが個人の経験の結果的発展によるものであるという立場に立てば、身体的に丈夫な者と病弱なものとは、その経験の度合においても種類の点でも全く異ってくる。また知能の点においても全く同様のことが言えるのである。

同一の体力と知能を持った者でも、与えられた状況が異なりあるいは彼に与える環境的条件に対する反応活動〈経験の種類〉によって全く異った経験を引き出す事もできるのである。三人の等質者も、一方ではチームのリーダーとなり、一人はチームの単なる部員となったとすれば、この二人の経験やその結果おこる反応綜合体〈パーソナリティにつながるもの〉は全く異ったものとなるであろう。また他の一人は適当な集団活動をなし得ない環境にあったとすれば、なおさらその比較は困難なものとなるといつてよい。

従って、個人の生得的資質はパーソナリティ形成に大くの影響を及ぼすものであるが、しかも、その影響の種類は環境的因子によって大きく左右される。これを考えるに、個人の生得的資質と環境的因子といずれをも優位において論ずべきではないのであって、むしろ資質と環境（養育）の関係において論ずべきであろう。

身体活動のもつ大きな役割は身体の成長と発達の促進である。そして身体的発達を促進する因子を考えてみると遺伝的因子（生物学的遺伝～遺伝原質、社会的遺伝～食物・衣服・病気・遊戯や練習・学校・家庭・遊戯場分、内泌線、自然環境、社会的条件（経済的・文化的条件））をとりあげることができる。しかも、これらの諸因子のもとで、個人が成長発達し得る最大限度まで発達させること、すなわち、生得的に得た能力を最高度に進展させる努力が身体活動に課せられた課題であり、体育の掲げる大きな目標の一つである。そこで、この生得的な諸要素（生理学的因子）がどれだけ個人のパーソナリティ形成に影響を

及ぼすものであるかに関して、信頼できるデータを得るための研究活動がなされなければならないのであって、この点でも重要な課題を提示している。

われわれの知る民話の中にも「氏より育ち」「高貴な血に生れると下賤の生活に在っても気品がある」などは、古い世代から語り伝えられたものであるが、ここでも検討しなければならない問題をもっているようである。<sup>6)</sup>このように生理的な因子によって、パーソナリティがどの程度決定されるか、そしてそれが<生理的な決定要素が>どの程度に遺伝するものであるか、また、このような生理的な決定要素は、基本的パーソナリティ形に影響するほど広く一社会のメンバーに分布され得るものであるかに関して実証的な科学的処理も望まれるわけである。

1. 個人の生得的な資質は、パーソナリティに影響を及ぼすものではあるが、然し、環境的因子によって大きく左右されるものである。すなはち、生得的な因子と環境的な因子のいろいろの組み合わせは常にある種の基本的態度の発展をもたらすものであって、体育の掲げる健全な身体活動～社会生活は、健全な経験とそれに伴う優れた反応において認めることが可能である。実際、体育の教育活動では、この目的のために体育活動のもつ多くの機会を安定した基本的態度の発展にむけんとしているのである。

然し、生得的な因子は、個人の経験に対する反応の綜合体<パーソナリティ>を形成する幾組かの因子のうち、その一つであるというに過ぎないであろう。個人の気質というものを考えてみても生得的（生物学的）なものか環境的なものか、その両因子の相互作用によるものであるかを明らかにされてはいないのである。また、誰でも学習と訓練を受ける能力を持っているのであるが、そこには個人差による結果の成果というものが生ずる。これを心理学的・生理学的な限界として推測することはできても、それがいずれの因子によるものであるか明確な判定を得ることは不可能である。

2. 個人の心理学的能力に対して生理学的な因子がある程度これを左右するものであると考えるならば、この点で「生理学的決定要素はどの程度遺伝するものであるか」と云う問題がおこる。

心理的能力に対する制定は、外面的な表示によってなし得るものであり、しかも外面的表示は経験によって影響されることが大である。<sup>7)</sup>心理的能力が生理的因子のあるものによるとすれば、それは遺伝によって影響されるとも考えられる。また、心理的能力の間に明らかに水準の差異があるということは、遺伝を認めることに疑問を生み、同時に個人の遺伝がわかってもその能力を予見することは至難なわざとなる。従って、個人の能力に無限の差異があるということは、それが遺伝によるものであると断定することはできない

のであるから、ある特定の水準〈能力の基礎となっているもの、すなわち生理学的因子〉はいろいろのしかもそれぞれいくつかの遺伝原質が組み合さってできたものであるとすることができよう。

体育では、それぞれ個人をその許される最高度〈遺伝原質のゆるす最大限までのばすこと、生理学的限界〉に發揮する作業を進め、遺伝的因子が複雑にしかも効果的な組み合わせによって、望ましい問題意識や態度と価値体系のもとに豊かな経験と反応を生ぜしめるように企図するものである。

3. 然し、繰返して述べるように一社会における基本的パーソナリティ型が遺伝の影響を否定することはできないのであって、ある場合（結婚、長期の孤立状態、祖先の同質性など）には明らかに外面的に平均したある水準を認めることができる。ある社会における基本的なパーソナリティ型は、平均によって求められるものであって、その平均値がそれぞれの社会の遺伝的因子によって異ったものとして現われる〈種々の社会心理的能力の規準性がそれぞれの遺伝上の差異によって異なり得る可能性〉ということができよう。

体育運動によって培うことのできるスポーツマンシップは、スポーツマンに共通な基本的パーソナリティ型をなすものといえるが、それぞれの運動種目によって培われる反応、態度、価値体系は、それぞれ異ったパーソナリティ型を表示するものである。人間の身体〈遺伝原質によるもの〉に作用する体育文化としての影響は、体育的社会集団独特のパーソナリティ型を形成するようにならうが、これは体育の持つ環境、経験、集団構成の場面や人間関係などが、他の社会集団や高度に一般化された価値・態度体系と矛盾するものでなくて、チームの持つ集団的諸条件や活動の場面は、社会及びそれに含まれる一社会内における特定の反応というには、あまりにも一般的な体育集団特性を持つというべきであって、ここに表示されるパーソナリティは、いわゆるパーソナリティの綜合体として他の社会、すなわち日常の社会生活に直結した場につらなるものであると見ることができよう。

〈体育的環境による影響〉 遺伝的因子もパーソナリティ形成に当って果す役割について決定的な条件であるとは説明し得なかつたのであるが、これに对照した説明は環境である。すなわち、社会のメンバーが成長してきた社会環境の相違によってそれぞれ異なったパーソナリティが形成されると考えられるのである。

パーソナリティを形成する環境的因子は人間と事物である。ところが、ある社会メンバーの行動も、使用する事物もその形体も、ともに定形化されたもの、あるいは一定の文化型として認めることの出来る存在である。この意味からすれば、発展しつつあるパーソナリティは、ある文化によって形成されるということになるのであって、この定形化された文化に対する接触から、個人の経験と反応の綜合体としての基本的パーソナリティ型を造

り上げると見ることができる。

体育文化の定形化された活動は、独特な動因や行動反応の規準を形造るであろうし、定形化された環境や施設・用具・資材は人々にある種の活動(特殊化された反応がもたらす)を惹き起させることになる。

このように事物が(物質文化)及ぼす影響と人間及びその行為(行動の文化形また精神文化)の及ぼす影響の二面を考えるけれども、これを主体の側から見るときにおいては、パーソナリティの発達途上にある場合<パーソナリティの形成過程>に対して、文化の影響を次の二面に要約して考察することができる。

(1) 主体に対して作用する他の個人の行為が、文化型に従って行われる場合 (2) 主体がその属している社会の特徴ある行動型を観察し、それに従う<観察, 記憶, 批判, 欲求>場合である。

他の諸作用は幼時において影響するところがはなはだしいであろうし、このような直接子供に向けられる作用(文化型に従った行動)は将来において習慣的反應を形成することになると見るべきであり、また、自己をとりまく環境の特殊な行動型の観察やそれに従うための訓練は、自分の行動型を形成するために多大の影響を及ぼすものであるということができよう。

このようにパーソナリティの形成は、定形化された文化の接触から、個人の得る経験によってなされるものであるということは疑う余地をもたないのである。

体育文化として特徴を持つ行動型や用具の形体、心理的な情緒反応、集団過程、人間関係、身分役割などは集団内における文化的因子としてパーソナリティの形成に及ぼす作用であると説明することができるのである。

\*

1) 動因—欲求と同様に、生得的なものとして学習の結果得た習得的動因の二種類

※ 人間は生物学的個体として生まれ、社会化の過程においてパーソナリティを形成して行く。潜在的能力(生物学的・遺伝的な構造と機能)とくに刺戟感受の能力、刺戟反応の能力、学習の能力を有し云々(社会学講座, 1巻, P. 165—166)

2) Rorschach test (1921年に発表されたプロジェクトブ・テクニック<投射法とも云う>)によるパーソナリティ診断テスト)

性格の内面にあって十分自覚されない感情、欲望、動因の傾向性を大まかな不明瞭な刺戟を与えて反応を洞察し解決することによって測定する。(社会調査ハンドブック・安田三郎—1960 有斐閣, 社会心理学の基礎—1959 中山書店, ロールシャッハーテスト・心理診断法双書—1958 中山書店)

3) (1) 社会によってパーソナリティの規準が異なること

(2) 一社会のメンバーのパーソナリティには、常に相当の個人的差異が見られること

(3) すべての社会を通じてこの差異の範囲が類似しており、また殆んど同じパーソナリティの類



型が見られること (Ralph Linton 文化社会学入門・清水・犬養訳 P. 157-1958創元社)

- 4) 勇敢な態度を分有するチーム内メンバーも、その行動は自ら異なった反応を見ることができる。個人、性別、身分、役割、チームの価値-態度体系によって態度と結びついた行動といえども必然的に異なったものとなろう。

基本的パーソナリティ型と呼ぶ綜合体は、社会のメンバーに共通の思想と価値を与え、共通の状況に対して一致した情緒的反応を示し得るようにする。

- 5) 紀要10:社会的態度の概念参照  
 6) 社会学の基礎理論(上) ビティリム・A・ソローキン(鷺山丈司訳) P. 36 参照  
 7) 外面的表示は、常に個人の過去の経験によって影響されるものである。従って優れた知能テストでも、異った文化背景をもつ集団に適用するときは満足な結果が得られないと云うのは、個人の生得的能力が純粹に発生的な研究的方法から確定され得ないのはこのためである(前掲, 文化社会学入門 P. 166)  
 ○ 社会学の基礎理論(前掲)第二章 社会学の発達・参考

#### Ⅳ 体育とマスコミュニケーション

##### (1) マスコミの体育に対する影響

さきに紀要9において、体育の文化社会学的立場から、マスコミュニケーションを扱うとき、体育とマスコミュニケーションの関係を社会変動や社会問題として取り扱う場合と企業体として集団社会的立場から研究する事もできることに触れているが、**mass communication(大衆伝達)**が種々なる文化の形成と伝達に大きな影響を与えるものであり、現代の社会行動を理解する上から欠くべからざるものであることは諒解に難くないところである。

個人の欲求・思考・感情の伝達(**personal communication**)交換にもまして、集団意見として不特定の**大衆**に影響を与える**マスメディア(mass media 媒体)**の発達<sup>1)</sup>は、コミュニケーション効果として受け手の社会行動に反響するところ大である。このことは、個人々人の理解に応じた受け取り方と反応の仕方を示すことを建前とするものであるが、現代マスコミにおいては、**一方向性(一方的と云うべき形態)**をもって次々と迫って来る。従って、受け手の各々にその欲求、観念、感情の表現に当って、正しい反応を示す暇を与えない、与えられた情報をたしかめる余裕を持つことすら出来ない事態を惹き起す。そこで個人がその送られた内容を、各自の理解に応じて受け取り内容として受け取ることが出来ず一方的に受け手の心情に喰い入って来る。

最近のように、マスメディアに**商業性**が加わって来ると、受け手である大衆の関心に適合することのみに重点がおかれ、そのことのみが一層望まれるようになり、マスメディアと大衆との関係を**一方向的な連けい**において結んでしまう。そして、商業主義は大衆の要求に迎合(適合)すべく**センセーショナリズム(sensationalism)**な情報の提供によって

受け手の欲求は、ますます歪んだものになってしまうのである。マスメディアの商業的競争は真実をはなれて情報を捏造し、受け手を迷わせて不合理な行動に拍車をかけることすら起り得るのである。

体育就中、スポーツとマスコミの関係は、現代社会の産物として特筆すべきものであるが、勿論その実態は社会の構造の差異によって異なるであろうし（文化と称するものの質的差異もあろう）媒体であるマスメディアの普及状況によっても異なってくる。

殊に、マスコミと商業主義との切り離し得ない関係は、体育スポーツをいかような立場において報道し、いかような状況のもとにおいて媒体たらしめるかという面で、問題を掲げている。

交通や通信の発達に加えて言論の自由が拡大され、地理的な閉鎖性（限られた地域）の打破によって、所属する集団における安定感や所属意識を弱体化し、また階級的な閉鎖性（身分や地位の上下）の打破によって、上層から下層（下向性）への命令要求を批判し反省する機会を得たといえる。この二つの立場は、集団成員の連帯意識を弱め、階級意識のもとに立つ連鎖性をなくするものとなっている。

過去においても、体育・スポーツの集団が資本主義社会や封建社会の影響を受けたことは見逃せない事実であり、体育活動やスポーツの文化人類学的発生の要素を、そのまま現代スポーツに当てはめて論ずることは満足されない面を生じてきた。マスコミは、資本主義社会のもとで急速に発達したものであり、封建社会で行われるマスコミコミュニケーションの姿と、現代のマスコミコミュニケーションの姿とは自ら異ったものを持っている。

体育スポーツの集団では、成員が集団内における安定感や所属感を強くもち、連帯意識を強める事を要求する場合が多く、ある時は集団内の地位や役割が階級性を保持し、封建社会的集団を形成してきた。またこのことが、ある種の優越感となり、排他的閉鎖的な集団意識の育成へと発展することにもなるのである。しかし、現代スポーツは資本主義社会の影響を受けるところが大であるとすれば、封建社会のもとに発達したスポーツとは本質的に異なったものであるという仮説をたてることができる。

絶対主義国家が生まれて、国家権力が増大することで、マスコミの国内統一がなされると、地域的閉鎖が除かれて国内的拡張が起るが、同時に国家権力による統制弾圧が厳しくなってくる。然し、近代国家においては、言論の自由が拡大されると全体社会の中でマスコミの果す役割は重大となる。そこで、体育・スポーツ集団の集団成員の役割や集団経過集団凝集の度合、集団機能など小集団意識に対して開放性を持って反響してくるマスコミの役割が、どこの点で交錯しているか、どの点で衝突し反撥しているかについて考察する

必要も起ってくる。ましてマスコミによって受ける影響を大きく担っている体育やスポーツにおいておやである。

## (2) スポーツとマスメディア

マスコミュニケーションが現代産物であり、マスメディア (mass media) に商業性が強くなったということは、受け手である一般大衆に迎合すべく受手側の要求や関心に適合する事を一層必要とする。この点で、書籍、雑誌、新聞、映画、ラジオ、テレビジョンの普及と発達に応じて記事、番組の編集や構成に大きく影響を与えることになる。

然し、体育やスポーツにおいては、本来の姿が人間の本能的欲求発生によるものであり表現される情意や技術が大衆の生活活動に伝波し共鳴し得る可能性を持ったものであり、各個それぞれに内容を理解し、楽しむのに社会的水準に（知能、意識、階級差に応じた区別なしに）適応する配慮によって提供しなければならないような情報を必要としないのである。

殊に、電波によるラジオ、テレビジョンの普及は、電波文化へと移行し、大衆に与える影響と滲透力をますます増大してきた。例えば、NHK放送文化研究所が、ことし初めて実施したテレビ番組の聴視率調査結果が発表されたが、その番組の種類別に平均聴視率を比較すると次のようである。

① スポーツ＝11.7%      ② 娯 楽＝11.2%      ③ 報 道 ＝ 5.2%

④ 教 養 ＝ 4.5%      ⑤ 教 育 ＝ 2.8% である。次に教育テレビも含めてNHKの全番組について人気のあるものベスト20番組を種類別に分類すると、娯楽番組12  
スポーツ関係4、報道関係2の構成になっている。<sup>2)</sup>

このような傾向は、書籍、雑誌、新聞においても例外でないであろう。今やスポーツは今日の社会における共通話題であり、関心事であり、また、現代の課題として考えられる事柄<sup>3)</sup>に生長している。

スポーツの文化領域は、一地方、一国家の範ちゅうから脱皮し、全大衆社会、国際社会の共通文化として飛躍を遂げるのみであって、常にその時代の社会意識やイデオロギーを形成し、人々の心情に触れては人間性の自覚を喚起し、生命力と活力の糧となるのであって、この時代の最も新鮮な感覚（現在の感覚）として、われわたの生活の中に大きな比重をもつに至っている。

## (3) スポーツとマスコミの機能

現代社会においては、スポーツの地域的な閉鎖性は一応破られてしまったと見ることが

できる。印刷、報道、電波、交通の発達によって、広範囲にわたるマスコミの開放性が、スポーツの普及と大衆性を育成する事に重大な働きをしている。マスコミュニケーションの内容に階級的なイデオロギーの相違が見られず、封建社会に見られた身分的な相違によるコミュニケーションが除かれるようになってきたことは、話し言葉や書き言葉にも共通に理解できる程度の内容や形式がとられるようになったことである。

報道の機能は、正確なニュースと解説を伝える事にある。そして受け手の知識水準を高めることもできれば彼等の意見を反映させることもできる。あるいはまた民衆の意見を発表する機会を提供することも可能である。然し速く、正確でしかも信頼性のおけるものであるとのみは限らないのであって、送り手の意図やテクニックによって相手に与える印象も違ってくる。また、真実味の点から考えても、不注意や誇張やセンセーションナリズムなどから真実を欠く報道も起り得るのである。

特にラジオ、テレビの普及は、印刷物を媒体とする報道の役割を減少して来た。すなわち安易な解説性に重点をおき、また娯楽性の記事のために大くのスペースをとってスポーツや娯楽、映画、演劇などにかたよって行くようになる。速く、正確で、真実性があると云う点では、ラジオ、テレビに及ぶものはないが、印刷物の中でも活字の部分よりも写真の部分を増やすような傾向になって来るのは止むを得ないことであろう。

スポーツのもつ大衆性（近代性）は、マスコミの影響を受けることが大きいから、報道性と解説性の二面において受け手である民衆に真実を速く報道すること、正確な解説をほどこすことを必要とする。このことはスポーツのもつ普遍性によるものであって、その内容に知的水準による操作を加えて内容の構成を考慮する必要がおこらない。すなわち伝えられたものはそのまま媒体となって民衆と結びつき解け合うことができる。

然し資本主義社会の中において media に商業的要素が作用すると、報道や解説に変化の興味やセンセーションナリズムな誇張が加えられて、言葉も面白く真実から離れた憶測や感情を交えて受け手の欲求を満たそうとするようになる。このような傾向は、娯楽化芸能化の面のみに努力が払われて資本主義や企業性と結びつき、本来スポーツのもつイデオロギーを変貌したものとなって現われ（これが近代的スポーツの本質というべきものか…）企業と結びついたスポーツとなって多くの問題をかかえてくるのである。

アマチュアがマスコミの作用を受けて、いつの間にか商業的メディアの役目を果たすことになり、プレーヤー自身が将来プロ化の足場と考えるようになり、職業選択の好条件と考えたりするようになる。資本家や企業家は、民衆にうたえはスポーツに対する社会意識を自分達の都合のよい方へ（利潤をあげるのに都合がよい）導いて行こうとする。この

雰囲気はプレーヤー自体を不健全にし、観衆の欲求を異常な刺激に導き、スポーツのもつ精神文化体系を不安なものとし、社会集団における各分野において集団のモラルを健全に保つことを不可能とするのではないか、という危懼の念を孕んでくる。

然し、反面においては、コミュニケーションの効果を利用して権力に対する批判を行い封建制度に対する意見を表明し、民衆にアピールして社会的機能として活用することができるのである。

マスコミュニケーションによって民衆に与える**教育機能**も今日ではますます広く深くなってきた（この点ではかつてよりパーソナルコミュニケーションを通じて行われるのが原則である）<sup>4)</sup>

殊にラジオ、テレビの普及は、近代に視聴覚教育の波を起し、観念的なものから感覚的感情的なものへ、活字による抽象的なものから音や映像によるイメージ（image）を通じて行われるようになった。この点では視聴覚教育はその大きな役割が認識され教育の主要なる手段として重要視されるであろう。すなはち大衆教育として人間の生活に大きな影響を与え変革を呼びおこすことによって、マスコミュニケーションの効果が発揮されるのである。今までのコミュニケーションによる表現の手段は、音や映像を通して行われるものとは異った性質を持つものであった。ところがラジオやテレビは大衆を合理的な態度と行動に導く手段となって、科学や芸術やスポーツに新しい世界と分野を切り拓いて行く。これに加えてラジオやテレビを通じて社会的なアピールを求め**大衆説得の機能**を利用して社会問題についての合理的な態度や行動をとらせるようになる。<sup>5)</sup>

ある状況に応じて特定の態度や行動を起させ、マスコミュニケーションの効果をあげるためにいろいろのテクニックが工夫されなければならない。すなはち、内容、力点、クライマックス、送り手受け手の複雑な条件などが考慮されるのである。そうすることによってコミュニケーション効果にいろいろの差異が生じて来るようになり、社会的アピールの仕方も教育よりも感情的な要素を含めて行われる場合が多くなって来る。従って送り手の意図によって（問題に関する内容の説明の力点の置きどころによって、クライマックスと煽情のテクニックによって）ある程度その効果を予測し影響を与えることができる。

このようなコミュニケーション効果が資本主義や企業主義、商業主義の好餌となって、スポーツが社会大衆に浸透し、生活の一部となって行動や態度に影響しつつあると云う点で問題を持つことは否定できない。

マスコミの発達にしたがって、宣伝の機能は国家的・国際的な規模で行われるようになる<sup>6)</sup>、いよいよ洗練されたテクニックで民衆に働きかけてくるのである。

直接にしろ、間接にしろ、いろいろの原則に従って<sup>7)</sup> 宣伝が行われるのであるが、スポーツの持つ本能的な活動性と情意の面が送り手の宣伝テクニックに上手に利用されて、非合理的な感情や情動に訴え、受け手の欲求、知性、感情が反社会的、非生産的な生活態度に傾倒することを警戒すべきである。

殊にスポーツはその力と美に加えて敬虔なる心理的内容を多分に包含するものであり、受け手に与える印象も純粹にして偉大なるものがある筈である。このわかり易くてかつ印象強いスポーツを、宣伝の用に供さんとして敢て誇張や暗示のなされることが考えられる。まして、総ての点でテンポの早い現代においては、その内容が純粹簡明であって形式の一般化したスポーツ宣伝が、娯楽の面と兼ねて大きく取り上げられていることも諒承しなければならない。

会社では宣伝のために自己のチームを編成し、国家では外交的手段としてまた国威の発揚を兼ね合せて、競技者の記録向上に拍車をかける。マスコミュニケーションが民衆の声としてやがて現代社会のイデオロギーとして競技者に迫ってくる。そして競技者は時代の英雄になり、専門の分野を離れてもその光を発揮する。そして自己意識過剰になり、あるいはマスコミのとりことなって利用されおどらされては、その個性を失い主体性を喪失してしまう。

このような暴力（腕力ならぬ力）は競技者（チャンピオン）の周囲（親族、縁者、コーチャー、マネジャ、とあらゆる近親者）を手中におさめ、観衆はマスコミのマジックにとりつかれて自己陶醉し己の声を宣伝のテクニックと混同して反省しなくなる。

以上のような事象も、その目的とする宣伝の機能によって商業宣伝と政治宣伝の領域で考えられる。政治宣伝は、時代の社会体制によって質的に異ってくる。然し、資本主義社会においても社会主義社会においても、未完成の社会（理想的な社会状態に到達しない過程）では、その思想や政策をいくら論じてみてもその効果は期待できない。それよりも専ら民衆の感情（受け手のもつ欲求不満、憎悪、恐怖、不安など）に訴え、煽動的テクニックをもって受け手の集団を方向づけ、理論的理性的根拠というよりも別の方法で欲求不満や不安を解消することにつとめようとする。

そのためにマスコミに統制を加えて民衆の目を奪い、異った方向に感情を誘導して心理的な混乱を与え、あるいは煽動してその機会を利用しその機に乗じて宣伝の効果をあげ、やがて説得と教育の機能によって政治的統一に導びこうとする。

スポーツの持つ競争、斗争の場面は、民衆の社会的不安に本能的な満足感と慰安を与え

その活動性、純粋性（公正、協力、明朗、無欲、尊敬、没我、奉仕など）平等性などの場面は、民衆を陶酔境に夢遊させスポーツの英雄を作っては拍手を送る。

人々は思想から逃避し、スポーツマンは純粋な心で資本主義社会や社会主義社会に奉仕する。個人の記録がマスコミによって国家の記録となり、資本主義国家と社会主義国家の対抗となって宣伝される。この間においてアマチュアリズムが論議されブロークンタイムペーメントやステートアマチュアが生れ、政治領域がスポーツ領域にとってかわろうとするのである。

本来、政治と無縁であるべきスポーツが、マスコミの宣伝によって無批判無抵抗に社会体制の支配を受けることに反省の余地があろう。スポーツが時代の思潮に左右されることは史実の示すところであるが、政治宣伝の効果が恒久的なものであり得ず、スポーツマンシップや民族の習性を変えたり国民性を左右する力を十分に発揮することはできないのであって（かつての第三帝国主義の謳歌も、一度失敗に終るとその効果は全く消え去ってしまった）理性的、思想的反省と政治的批判の機会を十二分に確保すべである。

商業宣伝は購買欲を刺戟し販買の実をあげるためのものであって、そのために広告により、P. R (Public Relations) により宣伝しあるいは説得する。商業主義的な宣伝（反復、誇張）が加えられて民衆を企業や事業の中に引き入れてP. Rする。相互の理解と好意を売り手と買い手の関係におき、個人と個人、団体と団体、集団と集団成員、指導者とメンバーのP. Rに置きかえて集団活動の実績をあげることをねらうのである。

有名選手の後光効果を利用したり、チームを編成して宣伝するかたわら、集団内の内部的P. Rのためにチームを利用して集団活動の実をあげるが如き手段は、スポーツを商業宣伝に利用するものである。

プロスポーツの娯楽化を促進する一方、アマスポーツのプロ化をうながすことになり、この点で今日起りつつあるいくつかの問題<sup>※</sup>は無関心で放置されない事柄に発展している。

#### ※ 会社とスポーツ

旭化成では社業の状況から今後一年間、各種スポーツの対外競技になるべく参加しないことになったそうである。旭化成といえば陸上をはじめスポーツの盛んなことで知られている。宮崎県など今年の国体選手一般の部68人の中64人まで同社延岡支社の選手で、同支社から出場辞退の申し入れを受けた県体協では、あわてて同社に再考を求めた結果、人数を36人に減らして出場することになったといっている。

この春には、神戸の川崎重工業が対外試合とりやめの方針を決めた。最近では日本スケート連盟が3人の選手を5ヶ月間スエーデンで合宿練習させることにしたところ、そのうち2選手が勤めている王子製紙苫小牧工場が5ヶ月は長すぎると参加を断わった。事情は必ずしも同じでないが、会社とス

ポーツということも考えてみるに値する。

レクリエーションという言葉は、もともと「再び創造する」ということだ。遊ぶことによって気分を新たにし、翌日の活力を養おうというものである。会社従業員のスポーツも元来はそうであつた。今でもその意味は大いにあろう。が、昨今はその外に宣伝ということが大きな意味をもって来た。対外試合によい成績をあげることによって社名をあげる。そのことにより大くの期待がかけられるようになったのである。ノンプロ野球などは特にそうである。

それともう一つ、一般従業員の士気ということがある。選手を応援することによって愛社心をかき立て従業員の結束に資しようというわけである。ところがこの士気も会社がスポーツを奨励すればするだけ高揚するというわけのものではない。選手があまり優遇されると却って反発を買うこともある。その兼ね合いがむづかしい。

数年前、鐘紡は社業不振のとき、野球の対外試合をやめさせた。野球などやっているときではないというのだったが、これはスポーツを止めさせることによって士気をひきしめたのだった。

すべて宣伝の時代で、選手一人がセールスマン何人に匹敵するという計算もできようが云々(1961. 9.24 朝日新聞、夕「今日の問題」より)

\*

- 1) コミュニケーションが終った後で、受け手の社会行動に永続的な影響を与えるなんらかの効果がおよぶとき、それをコミュニケーション効果とよぶ(前掲、社会心理学入門 P. 154)
- 2) この調査は、さる6月18日から7月4日まで、1日おきに9日間をえらび、全国の10才から69才までの聴取者を対象として面接法で行われた。調査相手の総数は約42000人で、調査時のテレビ全国普及率(NHK調べ)は35.6%である(1961.8.18 朝日新聞より)
- 3) この方面の研究活動も活気を提して来つつある。体育とマスコミュニケーション(近藤篤氏 福岡学芸大学) テレビのスポーツ放送と受け手の分拆(早川洋一氏 南山大学)は体育学会でも発表されている。
- 4) 教育機能はパーソナルコミュニケーションを通じて行われるのが原則である。受け手の知能や技能にうったえそのパーソナリティに影響を与えることであり、その反応やコミュニケーション効果によって一定の欲求や能力や感情を植えつけていく。
- 5) 説得の機能も広い意味で教育に含めることができるが、受け手に特定の態度や行動を起させることであつて、面と面と向って行うパーソナルコミュニケーションとマスコミュニケーションによって行われる大衆説得に分けられる。

6.7) 前掲、社会心理学入門 P. 166. 167 参照

参考。社会学「社会と文化」福田 直著 (角川書店)

- 社会学論集「社会心理 マスコミュニケーション」日高六郎編(河出書房新社)
- 前掲、講座社会学「大社会と集団」
- 現代マスコミュニケーション・清水幾太郎他編(河出書房新社)
- 前掲・社会心理学入門・南博著
- アマチュアリズム・井上春雄著(逍遙書院)

#### ※ 広告と文化

前略、新聞広告をみると、ある程度その国の文化水準がうかがわれる。略、そういえば、明治の初めころの日本の新聞にも広告は少なかった。その辺のことを考えると、たしかに広告が文化の進展を代表している一面がうかがわれるのである。

仙台のある商業高校の美術の先生が、新聞広告を教材として、巧みに利用している話を聞いたことがある。商業美術として、デザインの参考になるのはいうまでもないが、その先生の指導は、短文で訴える力のある広告文によって作文の勉強もさせる。さらに自動車とか電気器具とか、大小企業関係



の広告から、日本の産業の移り変わりにまで生徒たちの関心を高めてゆくということだった。

もちろん教室の中の教材として使われるのだから、先生も生徒も一つ一つの広告について、きびしく批判し合うのである。低俗なもの、悪趣味のもの、誇大にわたるもの、倫理的に許しがたいものなど、いろいろの角度から検討する。いわゆる「マスコミ時代」の広告の責任はいよいよ大きくなったことがわかる。(1960.10.7 朝日新聞・夕「今日の問題」より)

※ スポーツとジャーナリズム (sports journalism)

1. **スポーツと新聞** イギリスでは1744年6月11日発行の新聞にクリケットの広告を出している。アメリカ新聞の3S政策の中でもとくにスポーツは1903(明治36年)のウワールドシリーズ(プロ野球リーグ)から花々しく報道されている。日本では明治16年東京隅田川で海軍や東大のボートレースを東京日日、読売などがとりあげ、1956年現在では全国で約8種のスポーツ新聞が発行されている。

2. **スポーツと雑誌** 最も古いものは1897年(明治30年)運動界、専門書では日本山岳会の機関紙「山岳」が1906年(明治39年)、営利雑誌「野球界」1911年(明治44年)発行などがあるが、戦後では野球雑誌が氾濫して50種に及んだのである。現在では主として野球界、ベースボールマガジンがあり、総合雑誌ではアサヒスポーツその他プロ角力レスリングに関するものがあり、一般体育専門紙には体育科教育、体育の科学、学校体育、新体育、体育とスポーツなどがあり、その他体育協会の機関紙各種がある。

3. **スポーツと放送** アメリカでは1921年にボクシングの放送がなされている。日本では1927年8月13日(昭和2年)甲子園で全国中学校野球試合の放送が行われた(聴取範囲は大阪放送局管内)

4. **各種スポーツ賞と表彰形式**には次の

イ、**朝日体育賞** 朝日創刊50周年記念として朝日賞のうち体育分野では朝日体育賞とした。

ロ、**アサヒスポーツ賞** 東京、大阪、西部、名古屋の各運動記者クラブ会員投票による。アマチュアから10位まで1位を10点とし、プロから3位まで1位を3点として選出する。

ハ、**毎日スポーツ賞** 昭和24年制定、人員制限なく、スポーツ界に貢献著しい人を選定委員によって選出する。

ニ、**日本スポーツ賞**(読売) 昭和26年制定、各種競技団体が推薦した年度最高優秀選手を表彰する。

ホ、その他、**ヘルムス賞**(ヘルムス・ワールドトロフィー) 全世界の優秀スポーツマン表彰、**サリバン賞**(米国アマチュアスポーツ賞) などがある。(体育大辞典)